

《拙發表文:『傳統にたいする心構』より。恒存理論の圖的言ひ換へ》:當PP圖3～4頁参照。

* 文化(D1)のある處(換言すれば自國の歴史Cとの「適應正常化=非沈湎」が圖れてゐる國)では、「E」を至大化させる「型・仕來り・様式・儀式」が形成されてゐて、その「型・仕來り」が歴史との關係(文化)を形ある「物」として生き方に反映(Eを至大化)させてくれるのである。文化(D1)のある國は「仕來りE」を持つが故に、「對象・言葉との距離測定不能(言葉に呪縛)」が原因の、適應異常や狂氣の回避が可能となるのである。その事柄を「右圖」で言へば、「D1の至大化=Eの至大化」と言ふ事になる。「型・仕來り・様式・儀式」は生活・言葉への囚はれから人を救出してくれるのである。更に換言すれば、平生足をさらはれてゐる様な現實的平面から意識を立ち上がらせてくれる。なぜにそれが可能となるかと言へば、「型・仕來り・様式・儀式」に内在する働き、恒存の文章に従へば、以下粹文のダイナミズムをそれは宿してゐるからなのであると理解する。【「そもそも動作や作用、さらに人間の抽象的な営みを名詞化しようといふ働きそのものが、主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動なのです」(全三P204『日本および日本人』)

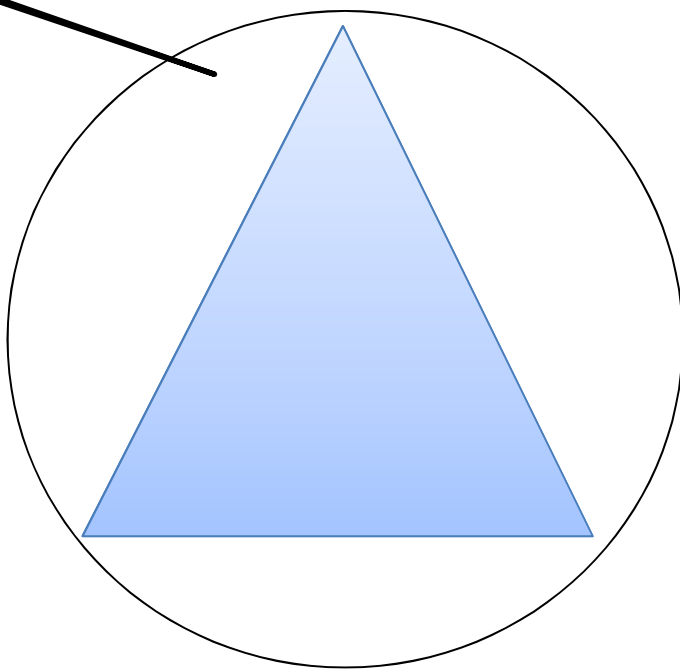
* 以下圖は人間(△圖)が物(F・言葉・○圖)に呑み込まれ「物との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「物が單なる物にしか見えない」状態。

* 「物が單なる物にしか見えない様では、人もまた物にしか見えない」

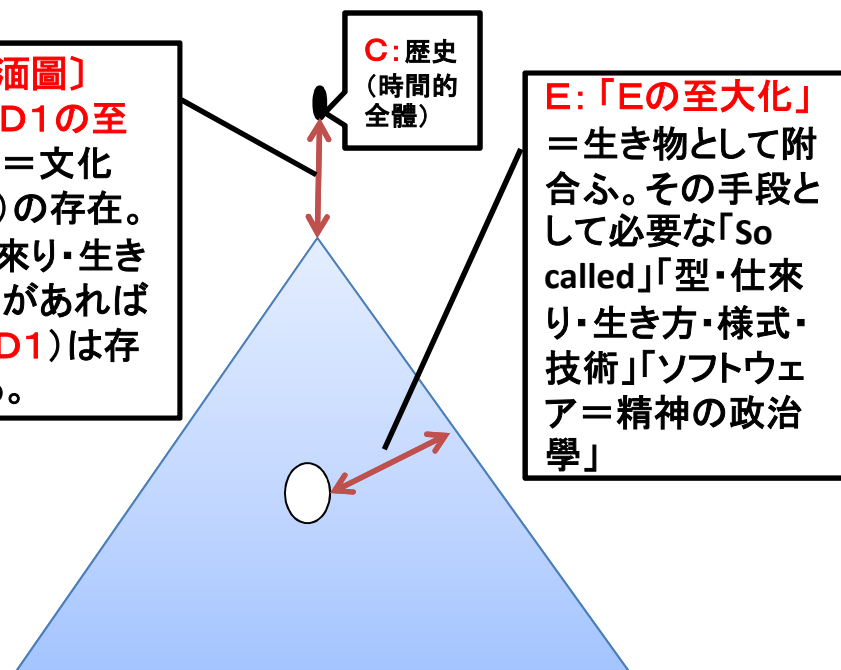
* 下圖は、「物(F・○圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化=自分と言葉(物)との距離の測定」が出来てゐる状態。

* 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来るとは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

〔沈湎圖〕
D1の喪失
はEの喪失。即ち文化の喪失
=型の喪失=物・言葉との附合ひ方の喪失...
「野蠻」
⇔文明



〔非沈湎圖〕
D1:「D1の至大化」=文化(關係)の存在。
型・仕來り・生き方(E)があれば文化(D1)は存在する。



「物(左圖)」と「生き物として附合ふ(右圖)」との違い。「大事な事は物(F言葉:○圖)を生き物として附合ふ事である」(『人間國寶』序より)。

何故ならば、場から生ずる「關係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得る」からである。故にせりふの力學、換言すればせりふ(言葉・物)との附合ひ方、扱ひ方。即ち「フレイジング」「So called」「型・仕來り・生き方・様式」の用ゐ方の適不適で、「距離の測定」即ち、場との關係(D1)の適應正常化(非沈湎)をさせる事が可能となり、また反對に適應異常化(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。「Eの至大化=D1の至大化」と言ふ事になる。

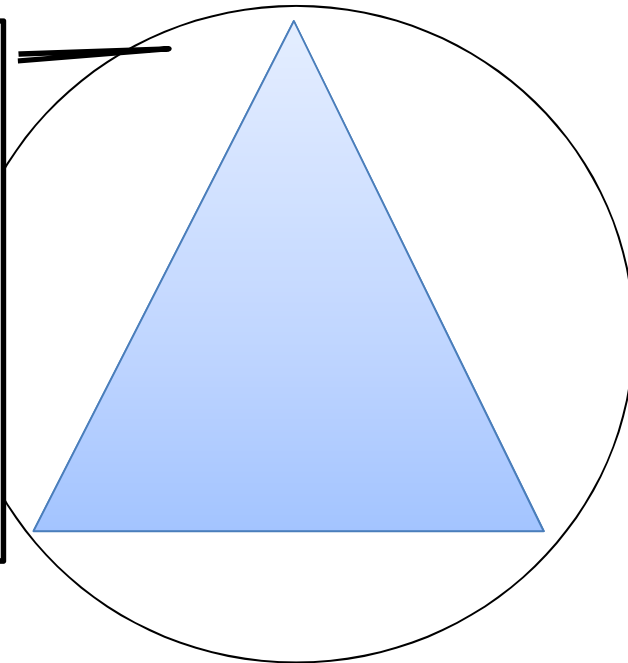
* 以下圖は人間(△圖)が物(F・言葉・○圖)に呑み込まれ「物との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「物が單なる物にしか見えない」状態。

* 「物が單なる物にしか見えない様では、人もまた物にしか見えない」

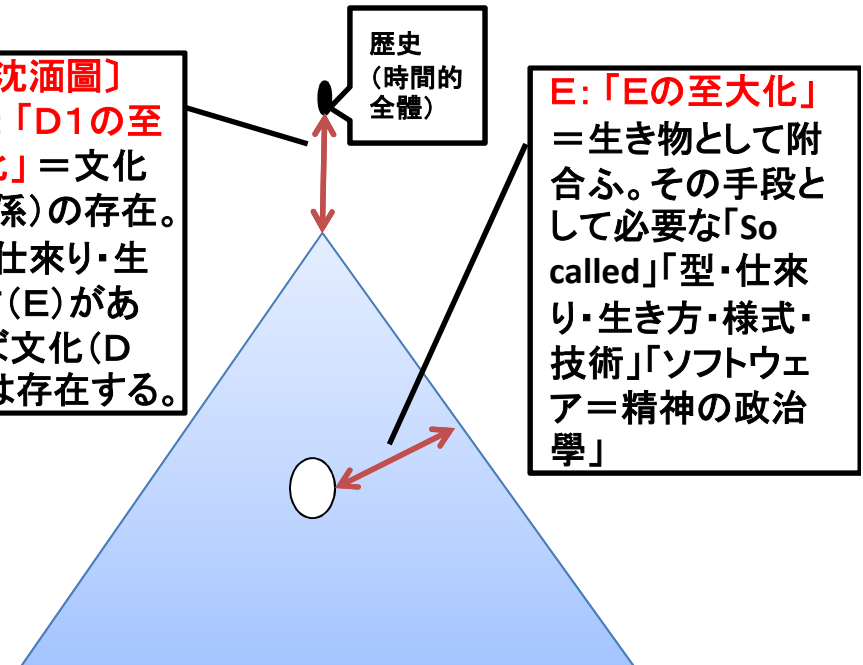
* 下圖は、「物(F・○圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化=自分と言葉(物)との距離の測定」が出来てゐる状態。

* 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来る」とは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

〔沈湎圖〕
D1の喪失
はEの喪失。即ち文化の喪失
=型の喪失=物・言葉との附合ひ方の喪失・・・
「野蠻」
⇔文明

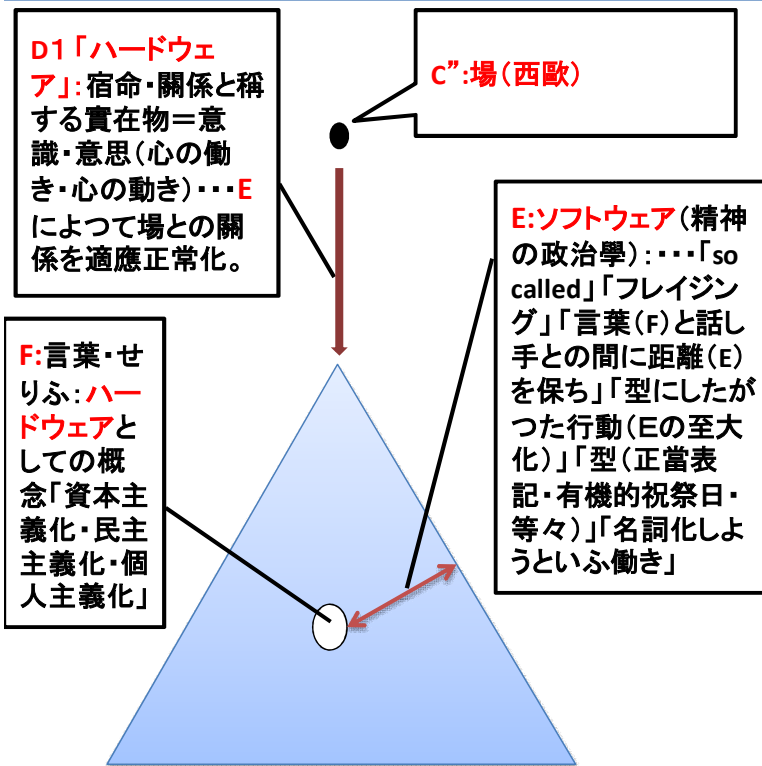


〔非沈湎圖〕
D1:「D1の至大化」=文化(關係)の存在。
型・仕來り・生き方(E)があれば文化(D1)は存在する。



E:「Eの至大化」
=生き物として附合ふ。その手段として必要な「So called」「型・仕來り・生き方・様式・技術」「ソフトウェア=精神の政治學」

場(c")から生ずる、「関係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(問答・對話・獨白:言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方(型・Eの形成=「型にしたがつた行動」)によつて、人間は場との關係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



①

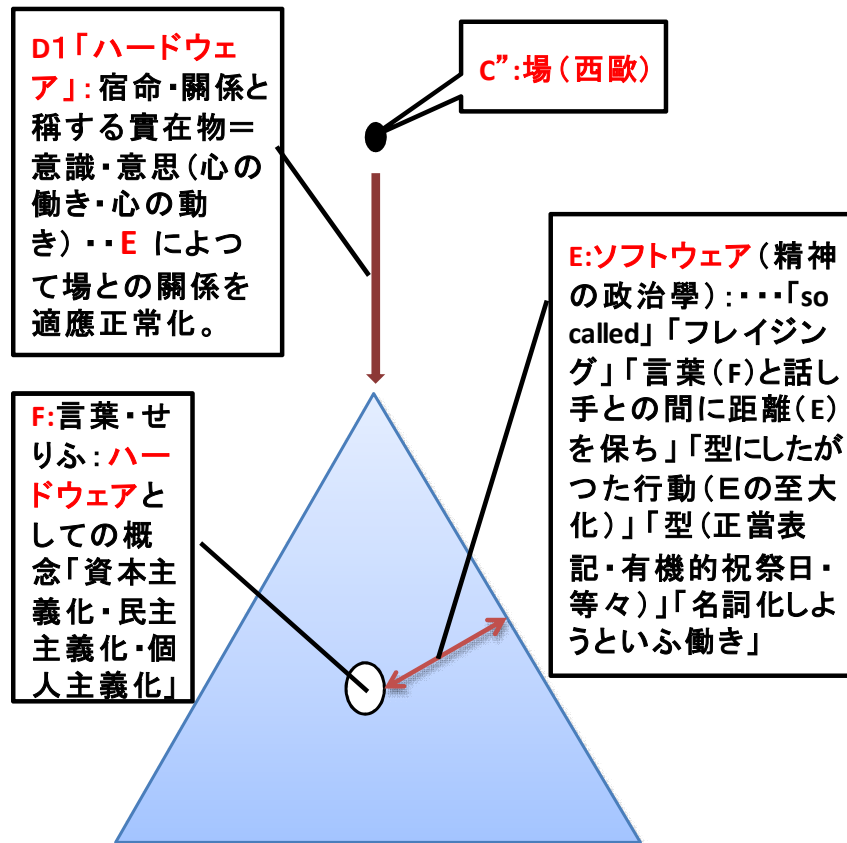
*「型にしたがつた行動(Eの至大化)は」、場との關係を適應正常化させてくれ(即ち必然感・全體感の獲得)、その結果として、生の充實感(實在感)を人間に齎してくれると言ふのである。つまり、型(正當表記・有機的祝祭日・等々)は、「歴史=時間的全體との關係」及び「自然=空間的全體との關係」を、即ち場との關係を、我々日本人に適應正常化させる能力を秘めてゐるのだと恒存は言ふのである(以下粹文参照)。

*「文化(D1)の根柢は言葉(F)にある事に氣附いてゐる人が餘りにも少ない。なぜにさうなつたかと言へば、戦後の國語國字改惡(型の喪失)が徹底した結果、言葉が文化を支へ、思考力(E:so called)や道德(E:型)や人格(FE:型)を支へ、その崩壊を食ひ止め得る唯一の財産だといふ自覺の切掛けすら持たぬ人達が多くなつたからである」(『新漢語の問題』全七)

* 恒存は『醒めて踊れ』で、「So called」「フレイジング」「精神の政治學」をソフトウェア的手段と捉へてをり、「精神の近代化」(個人主義の確立)は、ソフトウェアの効果的發揮によつて、その結果として齎されるものと捉へてゐる。(参照:拙文『醒めて踊れ』の下欄圖)

即ち、西歐(場)との關係(宿命)として齎された「近代化」への適應を、新漢語・外來語の用法(So called)で正常な關係に「形ある『物』として見せる」。それがハードウェアとしての近代化(資本主義化・民主主義化・個人主義化・機械化・組織化・合理化等々)に對するソフトウェア(精神の政治學)としての對處方法なのであると・・・。

場 (c")から生ずる、「関係(D1)」と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ (問答・對話・獨白・言葉) によつて表し得る。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方 (型・Eの形成=「型にしたがつた行動」) によつて、人間は場との関係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



②

- * 「言葉 (F) は物を指し示す物の影 (寫實) ではなく、「實在物=関係 (D1)」を目に見える様に傳へる用途を持つてゐるものなのである」⇒チーフに關聯 (前々頁)。
- * 言葉との附合ひ方である「so called=所謂何々=Eの至大化」「フレイジング=Eの至大化」の效果的用ゐ方で、「自分と言葉との距離の測定が出来」「言葉を自己所有化する事が出来る」。その働きによつて、結果的に場と言ふ對象から自分を分離 (非沈湎化) させる事が可能となり、しいては「場との関係を適應正常化 (D1の至大化)」させる事へと繋がる。
- * 「言葉 (F) と話し手との間に距離 (E) を保ち、その距離を絶え間なく変化させねばならぬのと同様に、相手と共に造り上げた場と自分との間 (D1) にも距離を保たねばならず、その距離を絶えず変化させ得る能力がなければいけない。さういふ能力こそ、精神の政治学としての近代化といふものなのである」 (『醒めて踊れ』) と。
- * 「自分と言葉 (物) との距離の測定が出来るとは「言葉 (物) を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉 (物) の用法に細心の注意をし、「言葉 (物) を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」 (P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。
- * 「そもそも動作や作用、さらに人間の抽象的な營みを名詞化しようといふ働きそのものが、主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動なのです」 (全三P204『日本および日本人』)

*

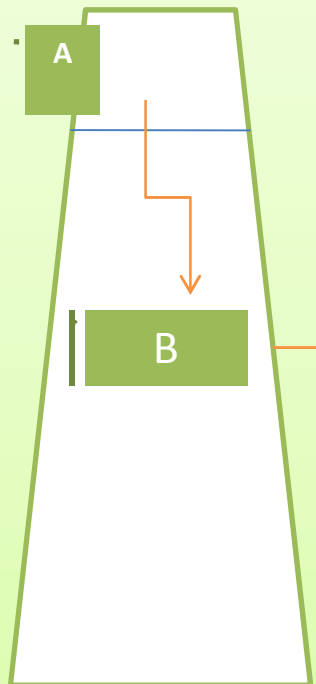
《日本の精神主義構圖》

$A \rightarrow B \rightarrow C'' = C2$ (西
歐概念の後楯化現象)

◎C2: 後楯・護符(西歐概
念=上位概念)

Oc''

絶対的自己肯定



「進歩・自由」(西歐的概念・新漢語)への適應異常・・・教育・西歐自然主義文學・戀愛等に對してと同一的「適應異常」現象と言ふ事では。そして、その原因として擧げられる事は以下の日本人の精神構造の特質である。

* 彼我の差を辨へず「自他未分の神道的生活態度で何にでもべたべた引つ付く」。それが禍し、實證精神によつての「テキストP8圖」化(「神に型どれる人間の概念の探究」)が叶はず、「テキストP9圖」に停留してしまふ。その結果「西歐的概念」は、「絶対的自己肯定」の爲の肯定因、即ち「C2: 護符・後楯」としての上位概念(世界・社會・階級、大思想)へと變質しまふ。以下参照。(参照: 左欄圖)

[拙發表文:『日本の知識階級』より抜粋]

恆存は、「日本の知識階級は言はば絶対的自己肯定者(C''自己主人公化)として終始してきた」と看破し、「私小説家・近代日本知識人、その典型としての清水幾太郎」の三者を、いずれもパターンは「テキストP9」の「日本精神主義構圖」だと言つてゐる。即ち以下の様に。

「現實(A)的不滿⇒B: 逃げ處としての個人的自我概念⇒C''自己主人公化(自己完成: 絶対的自己肯定)⇔「詩神・護符・後ろ楯の思想: C2」⇒自己満足・自己正當化(似非生き甲斐・似非實在感)」(参照: 左欄圖)

そして、彼等「絶対的自己肯定者はあらゆるものを自己の手中に収めようとして(權力慾)、その結果、自己の不滿(A: 現實的不滿)を處理する能力だけを失つた人間である。(中略)不滿の原因は現實といふ客觀的對象のうちにのみあるのではないのに、彼等はそれをそこ(A的不滿)にのみ見出さうとする。いや、さうする以外に能力も無く、方法も知らぬのであります」(『日本の知識階級』全5P369)。と、上記三者を當該評論で鋭く指摘してゐるのである。

そして彼等は「絶対的自己肯定」の爲に、その肯定因として「C2: 護符・後楯」を上位概念「世界・社會・階級、大思想」に求めようとする。何故ならば、西歐近代が否定因としての神を背景に持つに對して、前近代日本はそれを持たない。故に後楯による自己欺瞞が可能になるのである、と恆存は指摘するのである。